道徳のまち笠松の
ささえ合い通信 No.9 ボランティアの力でトンボ天国を美しく!

ボランティアの語源は義勇兵です。つまり自ら進んで奉仕活動に無償で参加する人が、ボランティアといわれている人です。ボランティアの方々に支えられて笠松トンボ天国の環境美化活動を今年も実施します。

笠松トンボ天国の環境美化活動に参加するボランティアの人はどんな気持ちをお持ちなのでしょう?きっかけは次のようでした。人の背丈ほどもある竹や雑草がはえたため、日光が当たらなくなり、下草が枯れ始め雨が降るたびに土が流れて池が濁り、大切なヤゴや水草が死滅してしまうということでした。そこで4年前から「トンボ池を守る会」「下羽栗地域の町内会」「道徳のまち笠松」をはじめ、「下羽栗小学校PTA」や地元NPOと企業、一般ボランティアなどが、池のヤゴや水草などを守りたいという思いで、一致協力し、ジャングルのように茂った竹や雑木・雑草の伐採を行うようになりました。

例年、朝の8時から9時までの暑い中、200人ほどの人が集まり、エンジン付きの草刈り機の轟音や混合油の匂いの中で、皆さんが熱心に作業を行った結果、笠松トンボ天国の周辺は見違えるほどきれいになりました。

今年も**7月17日**の**午前8時**から笠松トンボ天国の環境美化活動を実施します。「ぎふ水と緑の環境百選」にも選ばれた「笠松トンボ天国」を町民の方々のボランティア精神で守り抜きましょう。是非、環境美化活動へご参加ください。

ボランティア活動の様子

かさまつの民話「昔ばなし」

かせくり ⑥

どれだけ時間がたったであろうか。ふさは、父の口びるに、ほんの少し赤味がさしてきたのを見のがさなかった。ほとんど同時に、医者様が、

「もうだいじょうぶだ。体が冷えきっているから、一週間は安静にしてやりなさい。」

と言って、ふさの方を向いてにっこりと笑った。そのとたん、ふさは、父の上におおいかぶさり、

「おとっちゃん。」

「おとっちゃん。」

と、はげしく泣きふした。母は、ふさの後ろに立ったまま、じっとなみだをこらえていた。

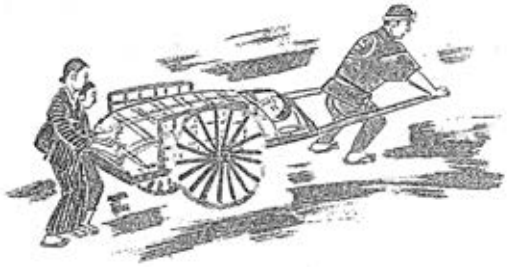
となりのおじいさんに手伝ってもらい、父を大八に乗せた。前をおじいさんが引き、二人で後ろをおして家に向かった。

「おとっちゃん、働かんでもええぞ、ねてろよ。ふさが、今までの倍もかせくりをするでな。」

「てんまりなんかふさはいらん。かせくりのお金で、おとっちゃんにおいしいお酒を買うてやるでな。」

ふさは、大八車の父に一生けんめい話しかけていた。母は、そんなふさを見ながら、野良着のそでしきりに目をこすっていた。

「かせくるぞ、かせくるぞ。」

ふさは、自分にしっかり言い聞かせるようにつぶやくと、大八車をおす手に力をこめた。

（おわり）